高齢者の豊かな生活のために　　２０２６年５月１日発行

手 賀 沼 通 信（第３３８号）

Ｅメール：nittay@jcom.home.ne.jp　http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/　新田良昭
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai　http://tegatu2.web.fc2.com

今月は１月号に引き続いて、大学の後輩北村尚巳さんから頂いた３編のエッセイをご紹介いたします。

北村さんは、多彩な趣味と強い郷土愛もっておられます。

いずれも読み応えのあるエッセイです。

特別寄稿

私の「ゴールドベルク変奏曲」愛　北村 尚巳

それは昭和 39 年の 10 月のことだったと思う。旭川の喫茶店の窓際の席で外から差し込む陽を浴びながら、流れる音楽に耳を傾けていた。

東京では『田園』というクラシック音楽を流す名曲喫茶店があったが、旭川のそれも同じような喫茶店で、お客のリクエストに応じてレコードを掛けていた。

昭和 39 年に就職して最初の勤務地は札幌だった。同期で札幌に配属になったのは私を含め３人、その内の一人に「十勝岳に初雪」というニュースを見て、雪を見に行きたいと誘われて十勝川温泉に一泊旅行に出かけた。

その帰りに旭川に出て、列車時刻を待ちながら喫茶店で過ごしていたのだ。そこで、次の音楽が流れだした時、体に電気が流れたような衝撃が走った。チェンバロのゆったりとした嫋（たお）やかなテンポの曲であった。クラシック音楽に詳しい友人に何の曲か尋ねると、J・S バッハの「ゴールドベルク変奏曲」の出だしのアリアだと言う。アリアに続いて 30 の変奏曲が続き、最後に出だしのアリア戻る長大な曲だ。多分、演奏者はカーク・パトリックではなかったかと思う。

この曲で、私の「ゴールドベルク変奏曲」への関心が高まった。その頃レコードデビューしたばかりのルドルフ・ゼルキンの息子ピーターのレコードを購入した。

その後は新たな演奏には手が向かなかったが、１９８１年に発売されたグレン・グールドのレコードを買って、再び衝撃を受けた。G・グールドはピアノ演奏であったが、この後終生彼の演奏は私に最高のものとなった。彼は 26 年前にも同じ曲をレコーディングしているが、録音時 23 歳だった時のものは、最初のアリアのテンポは速すぎて、若さが逸（ほとばし）っている感じがする。

「ゴールドベルク変奏曲」は元々鍵盤楽器のチェンバロのために作曲されたようであるが（楽器の指定はない）、後年色々な楽器奏者はこの曲に魅了され、自分の演奏楽器でレコーディングする人が続出している。

同じ鍵盤楽器として、ピアノは当然挑戦者は数多い。中国人のピアニストのランランも録音までには数年準備を掛けて挑戦している。鍵盤楽器としてはオルガンも同類、似たような楽器アコーディオンの演奏もある。弦楽器では、弦楽三重奏や弦楽合奏、ギター奏者。ブラスの合奏など、多くの演奏者を惹きつけている。

私も、CD 収集で色々な楽器の演奏のものを 30 セット以上集めて、聴き比べて楽しんでいます。皆様も一度お試しあれ！

「ゴールドベルク変奏曲」と呼ばれている曲は、本来はＪ・Ｓバッハが自分の息子たちにクラビア練習のために書いた『クラヴィーア練習曲集第四部』として出版されたものである。バッハ自身はこの曲を《二段鍵盤つきクラヴィチェンバロのためのアリアと種々の変奏》と名づけたのだが、カイザーリンク伯爵に仕えていた弟子ヨハン・テーオフィール・ゴルトベルクのために作曲されたところから、一般に《ゴルトベルク変奏曲》（ＢＷＶ９８８）の名で親しまれている。主題をなす冒頭のアリアはフランス様式の サラバンドで、すでに１７２５年の《マグダレーナのための小曲集》に出ている(バッハの作か否かは疑問)。(角倉一朗『バッハ』)

バッハの弟子フォルケルによると、「不眠症の伯爵のために作曲された。同じ和声進行なので眠りやすい曲だが、バッハは気乗りしなかった」そうですが、フォルケルは物事を盛って書くクセがあったので、どこまで本当の話なのかはわかりません。（大井駿、指揮者・ピアニスト・古楽器奏者）

変奏曲は、ほんらいその主題とはかかわりをもたずに（シュバイツァー）、この主題の低音部に基づいて、続く三十の変奏が構成される。（磯山雅(ただし)）３０は１０の３倍であり、一つのまとまり、一つの世界 、しかも、この種のものでは最も大きな単位のそれを表す。バッハの創作態度は例によって極めて構成的である。彼は２曲おきに、つまり、第３変奏、第６変奏など３の倍数番目の変奏ごとに、同度から９度までのカノンを置き、第３０変奏には、カノンよりもっと古めかしい対位法技巧であるクオドリベットを据えている。（武久源造）

quod libet（ラテン語で「好きなように」を意味する）は、宴会などで行う、複数人がそれぞれちがう歌を同時に歌う遊びであった。バッハは当時の流行歌二つを組み合わせつつ主題とも重ね合わせて終曲としている。使われたのは、「長いこと御無沙汰だ、さあおいで、おいで」と「キャベツとカブが俺を追い出した、母さんが肉を料理すれば出て行かずにすんだのに」である。（ウキペディア）バッハは、このちょっとユーモラスな思いつきを楽しんで使ったに違いない。この変奏は、特に後半では一種独特なノスタルジックな響きをもっているし、最後の部分は長い旅からの帰着をイメージさせる。（渡邊順生）

特別寄稿
「いぬふぐり」に関わる想い出　　北村 尚巳

「いぬふぐりが咲いていた･･･」
この歌詞を私は時々思い出す。題名も歌詞の他の部分も全く覚えていないのに、この部分だけが頭の片隅に残る。

令和6年４月10日の讀賣新聞のコラム編集手帳に

『雨降りに散る桜の花びらもきれいだ。数日前、雨上がりに並木道の土の部分を眺めていたところ、

点々と咲く青い花に気づいた◆いささか 不憫(ふびん)な名のつくイヌノフグリである。･･･◆倉嶋厚さんが随筆に書いていた。かつて気の毒に思った人が「空色小花」「星のひとみ」といった名を考えたものの、広がらなかったという。』

と書かれているのを読んで、私が学生時代に加わっていた合唱団ユマニテ（近隣の津田塾大学と合同で作られた）で女子学生たちがユニゾンの清らかな声で歌っていた「いぬふぐりが咲いていた･･･」の部分を懐かしく思い出した。

編集手帳には

『日本の在来種は淡紅色の花をむすぶ。青い花は明治に欧州から渡来しオオイヌノフグリと命名された』

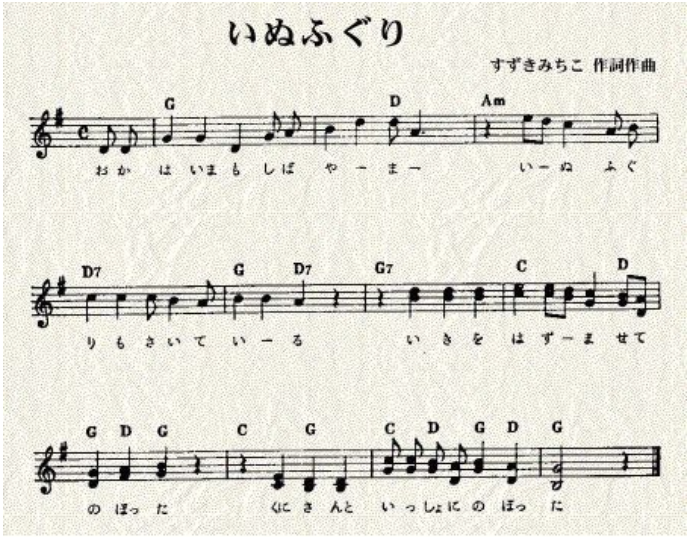
とある。イヌノフグリとは、花の実が後ろから見た犬のふぐりに似ているため、この名がつけられた由。

そもそも「ふぐり」とは、男性や雄(おす)の動物に付いている陰嚢のこと。女子学生たちは「犬ふ

ぐり」とは何か知っていて澄んだ声で歌っていたのだろうか？　今もって分からない。

讀賣新聞のコラムを読んで、この歌詞を思い出し、懐かしさのあまりネットで調べ、歌の音声もYouTubeで聴いてみて、今一つピンと来なかったが、どうやら曲名は『いぬふぐり』で、「１９５０年、朝鮮戦争が勃発し、参戦した米軍の基地がある日本で、今こそ戦争反対の表明を！と作られた。東大音感台唱研究会トニカ合唱団が学園祭で演奏し、全国に広がった歌」のようです。

「(トニカ合唱団員だった) すずきみちこは終戦を小学２年の千葉県木更津市で迎えた。戦中は「子ども民兵」として軍馬の肥料となる干し草作りに従事し、草を刈る草原一面に淡紅紫色のいぬふぐりが咲いていた。また、実家の奉公人を含め勇ましく出征した若者たちが、実は飢えで死んだことを知った時は幼心にショックだったという。」
そしてつくられたのが『いぬふぐり』



１：丘は今も柴山
　イヌフグリも咲いている
　息をはずませて登った
　くにさんと一緒に登った
２：お茶の子のむすびを持って
　二人呼び合いながら登った
　ももひきの小さな足を
　乾草の匂いが乾した
３：くにさんは戦争に行った
　イヌフグリを放りつけて行った
　手紙も届かぬ遠くで
　口もきかずに死んだ
４：麦のノゲを払いながら登る
　シパシパするなと言ってみる
　だけどくにさんは死んだ
　たくさんの人が死んだ
５：イヌフグリを忘れない
　くにさんを忘れないずっと
　戦争の悲しさを忘れない
　戦争が起こらんようにする

特別寄稿

惜別の歌　　北村尚巳

私の郷里小諸にも縁がある島崎藤村作詞の「遠き別れに　たえかねて」が歌い出しの『惜別(せきべつ)の唄(うた)』。私は、この歌はカラオケの持ち歌の一つとしており、友人との別離の哀しみを歌っているとばかり思っていたが、元々は嫁に行く姉に妹が別れを告げる歌だとは知らなかった。

『惜別の唄』は、戦時中に作曲された中央大学の学生歌・送別歌・卒業ソング。

作曲は、当時中央大学の学生であった藤江英輔(ふじええいすけ)氏。歌詞は、島崎藤村の詩集「若菜集」に収録された「高楼（たかどの）」に基づく。

島崎藤村の原詩は、嫁に行く姉に妹が別れを告げる内容の対話形式の詩だが、「姉」を「友」に差し替えて作曲された。三番の歌詞にある「くれないの　くちびる」や「黒髪」といった表現にその名残が垣間見える。

その後『惜別の唄』は戦後に「歌声喫茶」を通じて全国へ広まり、昭和36年（１９６１年）に小林旭の歌でレコード化された（小林旭版では歌詞は３番まで)。

「惜別の歌」は、昭和19年、中央大学予科生であった藤江英輔氏が軍需工場での勤労動員中、召集令状により戦地に赴く学友へ惜別の情を込め、島崎藤村の詩「高楼」に曲をつけたものである。藤江氏は制作にあたり、「高楼」の８連の詩から１、２、５、７連を抜き、１番の「わがあねよ」を「わがともよ」と変えている。

戦争末期「生きて帰ってこい」と言えない世情の中、秘かに友の無事を願う哀惜のメロディは、工場で口づてに広まり、送別の度に歌われた。戦

後、島崎藤村のご遺族からご諒承を得た上で、本学グリークラブ（中央大学文化連盟音楽研究会男声合唱部）の歌声でレコーディング（３番まで収録）された。その後、歌手の小林旭氏が歌い人気を博し、惜別の歌は中央大学から社会へ羽ばたき全国に広まった。現在も卒業式等で歌い継がれる本学にとって大切な学生歌である。

「惜別の歌」の作曲者である藤江英輔氏（昭和25法卒）は、平成27年10月14日に逝去された。享年90歳。

（以上、世界の民謡・童謡Web及び中央大学Webより）

１、（妹）遠き別れに　たえかねて
　この高殿(たかどの)に　登るかな
　悲しむなかれ　我が友よ
　旅の衣(ころも)を　ととのえよ
２、（姉）別れといえば　昔より
　この人の世の　常なるを
　流るる水を　眺むれば
　夢はずかしき　涙かな
５、（妹）君がさやけき　目のいろも
　君くれないの　くちびるも
　君がみどりの　黒髪も
　またいつか見ん　この別れ
７、（妹）君の行くべき　山川は
　落つる涙に　見えわかず
　袖のしぐれの　冬の日に
　君に贈らん　花もがな＊

＊「もがな」とは、古語で願望を表す言葉。～があるといいなあ…という意味合いです。つまり「君に贈らん花もがな」とは、「あなたに贈る花があればいいのになあ」という意味です。

ちなみに藤江氏は、４番の最後が「君に送らん花もがな」について次のように述べている。『当時は文字通り、一輪の花も無かった。友よ許せ…。言葉にならぬその思いが４番には込められているのです。是非、４番まで歌って欲しい』と。

【付】３、４、６、８連の歌詞
島崎藤村「高楼(たかどの)」
わかれゆくひとををしむとこよひより
とほきゆめちにわれやまとはん

３、（妹）したへるひとの　もとにゆく
　きみのうへこそ　たのしけれ
　ふゆやまこえて　きみゆかば
　なにをひかりの　わがみぞや
４、（姉）あゝはなとりの　いろにつけ
　ねにつけわれを　おもへかし
　けふわかれては　いつかまた
　あひみるまでの　いのちかも
６、（姉）なれがやさしき　なぐさめも
　なれがたのしき　うたごゑも
　なれがこゝろの　ことのねも
　またいつきかん　このわかれ
８、（姉）そでにおほへる　うるはしき
　ながかほばせを　あげよかし
　ながくれなゐの　かほばせに
　ながるゝなみだ　われはぬぐはん

小林旭の歌うYouTube URL
https://www.youtube.com/watch?v=Cw0Gpv_kgWY

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

惜別の唄は、松山南高校時代の同級生で浪人時代同じ部屋に下宿し、中央大学に進んだ友人から教わりました。

歌詞の奥ゆかしさと、哀愁を帯びたメロディに魅せられ、いろいろな会合でよく歌ったものです。

当時はカラオケなどなく、放歌吟唱で大声で歌いました。

学生時代の懐かしい思い出のいっぱい詰まった歌です。

歌詞が島崎藤村の作った詩であったことは全く知らず、北村さんのこのエッセイで初めて知りました。

この手賀沼通信５月号を編集しているのは、３月１１日です。東日本大震災が発生した日です。あれから１５年、年の流れは早いですね。

長男一家は仙台に転勤していて被災しました。幸いみんな無事だったのは幸運でした。

今午前１１時、２時４６分になったら黙とうします。

（新田良昭）